

江戸文學難語考

穎原退藏

はしがき

國語に關する辭書の編纂は、明治以來非常な進歩を示して居るが、實際古典を讀解するに當つては、なほ屢々その不備を感するのである。語彙の蒐集整理が完全に出来上つてゐるのは、實は上古中古の文獻だけに止つて居ると言つてもよい。近古以後の文獻にあらはれた語彙については、未開拓の部分頗る多く、特に江戸時代の語彙語法に至つては、纔かにその一小部分が整理されて居るにすぎない。これは殘存してゐる文獻的資料のあまりに多い事にもよるであらうが、又江戸時代の語彙語法が一見今日と大したちがひがない爲めに、世人から等閑視されて居る事も一の原因かも知れない。しかしや、詳しく江戸時代の文學を取扱つて見ると、その訓詁的作業が決して容易でない事は、すぐに氣づかれるであらう。今日源氏物語を講義するのと、西鶴や川柳を講義するのと、いづれがより困難であるかといへば、恐らく後者である事は、専門家の等しく首肯する所以であらう。

近世の國文學、延いては近世の我が文化の特質を闡明する

爲めに江戸文學語の蒐集整理に關する基礎的事業は、せひとも今少し進められねばならない。而してその難解な語を解するに當つて、最も合理的な方法は、蒐集された用例からの歸納的解釋で、これは先輩の國學者たちが、上古中古の語彙上すでに採つた所の方法である。だが江戸時代の言語を解するには、その時代が今日と接近して居るだけ、更に方言研究から直接的に知り得べき場合が少くない。現に筆者は自ら難解とした言葉が、京都の古い商家などで、現に使用されて居る事を知つて、忽ち疑問を氷解した事が二三に止まらない。もしこれを全國の方言に徴して見たら、多くの難語は案外易々として解されるのかも知れぬ。貴重な本誌の餘白をこゝにかりようとするのも實はその意に外ならない。願くは自家の以て難語としたものが、畢竟自家の難語たるに止まられし、そしてこの未熟な考が、方言研究者並びに江戸文學の研究者に何等かの參考となり得たらと思ふ。なほこゝにあげる難語は先づ年代的に享保頃までのものに見えのを主としてとる事にしたが、掲載の順序は思ひついたまゝである。又引用した

例は、特殊の場合の外は普通の假名遣になほし、假名を漢字に宛てた。

あいす 醒睡笑五「屋根葺いかゞしたりけん、ふみはづして落ちたり。目をまはし忽ち死ぬる氣色なるまゝ、人々不憫がりあいすを酒にて與へんと用意すれば。」東海道名所記三「したゝかに腰骨をうちけるが(中略)、皆いたはしがりにあいすの薬とて瓢箪の黒焼をとらず人もあり。」杉楊枝(延寶七)「骨たがひのあいすに瓢箪の黒焼よとてはつけども(中略)、はや／＼あいすを參らせよといふ。さらばとて一休の口の廻り黒筆をぞ流しける。」好色由來揃三「首の骨をうち折りあいすよ水よとわめけば」骨を挫いた時黒焼にして飲ませる薬と思はれるが、どんな薬であらうか。

あくべなし 傾城吉岡染(正徳三)上「年明くまでの月日をあくべなう思召されてか、但しは世を見限つての遁世か。」田雲、七小町(享保十二)四「去年の冬後室蘭の方の難題、百夜通はゞ小町様にめあはさんと御意の出た其時は、我々までびつくり、あくべない長の月日、

江戸文學雜語考

主は通ふお心でも、事繁き宿直の御番、病み煩ひもはかられず。」藤井博士の近松全集には「待遠く退屈にの意か」と註され、近松語彙には「飽く方なしの義。満足されない。もどかしう退屈な」とある。意はそれで通するが、方言として何處かでなほ用ひられて居る言葉ではなからうか。

あせらかす・あせあふ 寶藏二幕の條「さゝ蟹をとり、べいかをつなぎ、小猿をあせらかし。」織留六「其の子が我と手を口へ運び、笑顔せしとて、隣の噂たちがあせらかして、果報なる耳付、仕合せのそなはりし目の中と、一つ／＼ほめそやせば。」元祿文學辭典には織留の用例だけを引いて「おだてる。煽動する」と解してゐる。しかし寶藏の用例によれば、たゞ相手になつて遊ぶくらゐの意とれる。浮世物語二「今は昔、浮世房こゝかしこまどひありきけるに、若き者共四五人行合て、さま／＼なぶり物にす。浮世房もえせものにて慰みがてらと思ひ、うちつれて是にあせあひけり」とある。あせあふも關係ある語か。

あつち織・あつちちりめん 好色一代男二「あつち織の

中幅前にむすび。「天満千句第八」在郷は二千里の外町なれて 直成、もめんならびにあつち縮綿 如見、あ

なづつて貰ひますまい土用干 武仙。「この種の名詞は方言でも求め難いものであるが、とにかくあげておく。

あんごう・あんごう馬・あんご馬

加増曾我「これ祐經

あんごうらしく出抜かれ、月夜にかまぼこ不覺の至り」

男色木芽漬（元祿十六）五「おのしがやうなあんがうもあろかとなぶられて。「花千句（延寶三）」水鳥のおりても

魚をえとらいで 正立、あんがう烏鶉につかふらし

湖春、はひ出にてともまはらぬ供まはり 季吟。「出

雲、七小町二「秋津があんがう鳥、噂にしたいも道理なる。「信徳十百韻（延寶三）、延寶二初冬上句「火影ちろ

くごもくたくらし、あんご馬道のかたへにつなぎ捨て、額の毛貫氣色さびたり。「最後のあんご馬はやはり

あんがう馬であらう。あんがうは暗愚の訛長音と解されてゐるが、浮世鏡三には「中國に鞍をあんごうとい

ふ也。暗向也」とある。その語源についてはなほ考ふ

べきであらう。なほこの語は今なほ地方で聞くやうであるが、その用ひられてゐる範圍はどのくらゐであらう。

いきやく

女殺油地獄「我が身上の滅却あり、いきやくも交り行き違ふ」藤井博士も樋口氏も違却かと解されたが、なほ明解を與へられて居ない。尤も藤井博士は

近松語彙を批評された際、異客で旅人の意であらうと

訂正されたが（昭和五年六月大阪朝日新聞）、削かけ（正徳

三）「來さうなど、よ宮の日からいきやくども。」同「あ

てて見る、ちつと軽いがいきやくぢやなあ」の前例に

よれば、やはり異客といふ解に近いやうにも思はれる。

しかし後例はなほ解しかねる。薩摩歌の「いらぬ化粧業、何ともいきやく千萬」は、違却にちがひない。

おんぞろか

光廣、耳底記「世事有味は無能なりと菊

亭おしやつたれば、幽齋まつさうで御座あるなり。又

こなたしうづれがさう申すはおんぞろかなり。「烏帽子

箱」をん候か花のかたちの美人草 方女。「寶藏一、硯の

條「壽恩候敷祝ニ祥禎」。醒睡笑四「さればこそ天照大

神も内宮外宮とたゞせられたと。それは何たる子細ぞやと問へば、ないも食ふ下も食ふといふ事よと。それならば富貴の人のくふむねはなきかや。それこそ飯酒はおんぞろかのけてさいくう(齋宮)とたち給ふは。山之井、三月三日「よもぎのあもつく事はからの文にもあめると見ゆれば、をんぞろか是もけふの題なり。」以上の例によるとおんでもないと關係ある言葉らしく思はれるが、はつきりした解を得たい。

かなりがけ 沙金袋(明曆三)かくみても蜘蛛のすかきや蚊なりかけ 宗畔。「當世乙女織二」惣別女郎はよからぬものなり。ことわりなる哉、かなりがけの貧では賣らぬ娘を、極貧ゆゑに賣るを買取り。「鎌倉諸藝袖日記四」ひづみたる琵琶の撥音ばらりんくは是を此世のたのしみと、かなりがけに食物のある隠居。「この語の意は全く解し得ない。

おどもり・おんつもり 沙金袋「餘花も賣ちるおどもりの木末かな 春元。」雪女五枚羽子板上「身揚り分のおどもりも東方朔が九千兩。」加増曾我「よろづ御世話のおどもりならん、何もかまはせ給ふな。」出雲、七小町、

三「和歌三神の御たより、あさましさよと引寄せて、身の罪科のおどもり涙。」傾城禁短氣三「年々のしつ氣のおどもり出まして、物身はかやうに瘡にみしやれ、目は見えかね耳は遠くなる。」以上の用例でおどもりが「とどめつまり」とか「最後の結果」とかいふ意たる事は明かだが、元祿文學辭典・近松語彙の著者は共に澁滞の意たるおどむから出た語と解されて居る。しかし唐人躍(延寶五)四「北山の雪や時雨のをんつもり 友貞。」烏帽子箱「世の中のをんつもりなり富士の雪 方孝。」石山寺入相鐘(延寶四)下「三年に及ぶ飢饉の愁(中略)そのをんづもりいかゞせん」等の例があるから見ると、やはりおし積りの約轉と見るべきであらう。おつもり、盃を収める事)も同系の語で、なほ近松、天神記三には「その借錢のおどまりが、やうくこの頃いえ膏藥」とあり、難波立聞昔話(貞享三)には「其身大盡となり三人の影子にくるひ、其の積りにや地黄丸御腰をはなさず」ともあるから、おどまり、おもりとも言つたものと見える。